

宮城県仙台二華中学校・高等学校
Miyagi Prefectural Sendai Nika Junior & Senior High School

Super Global High School SGH

SGH

NEWSLETTER

Vol.3
2015
平成27年9月9日

発行 宮城県仙台二華中学校・高等学校
〒984-0052 宮城県仙台市若林区連坊1丁目4番1号
<http://www.nika.myswan.ne.jp/>

Contents

1. 講師紹介
2. 平成27年度第1回メコン川フィールドワーク実施報告(前編)
3. 同上
4. 課題研究 I (模擬国連)
今後の予定

講師紹介

ここでは、本校のSGHで継続的に世話になる講師の先生をお一人ずつ紹介していきます。

とぎわ ひでのり

戸澤 英典 先生

東北大学大学院法学研究科教授(国際関係論) /
公共政策大学院院長

<http://www.law.tohoku.ac.jp/~tozawa/Official%20HP/>

東北大学法学部で国際関係論を担当しています。特に、ヨーロッパ統合(EU)の歴史研究を専門にしていますが、国際関係論でくられる学問領域は地理的にも手法的にも非常に広いため、学部生への授業のため様々な地域や問題群についても日々フォローしなければなりません。水問題も専門というわけではありませんが、ゼミで学生のペーパーを指導したことが二華高の先生の目にとまりSGHに関与することになりました。ただ十分に時間がとれないため、国際法専攻の木村元助教に実際の指導をお願いしています。

生まれは岩手県盛岡市ですが、秋田市に単身赴任していた父親を訪ねて4歳の時に一人で田沢湖線に乗って以来、旅こそが人生だったような気がします。中学時代は山形市におり部活仲間と仙台まで自転車であたり、東京で下宿生活を送ることになった高校時代は九州に一人旅に行ったりしました。バックパッカー生活が主の大学時代を経て、ドイツ留学、ベルギー勤務と続き、(外国よりもカルチャーショックを受けた)大阪大学に就職し仙台に移って十年、ようやく落ち着いたというところで

しょうか。

もともと法学部を志望した際には法曹界に進もうと思っていたのですが、様々な国に興味の赴くまま旅行するようになって、自分の目で見た現場感覚と、報道・論評や学术论文にズレを感じて国際関係論に傾倒しました。学部2年の1987年に訪れた東ドイツとポーランドの実情は、当時大学で使っていた著作の描写とは大きな落差がありました。その後のベルリンの壁崩壊に際して「国際政治学者は誰も予測できなかった」と評されますが、後知恵をもって批評するのは簡単で、私自身も社会主義システムは続かないことは感得できたものの、わずか2年後にあのような国際政治の大変動が起きることは想像もできないことでした。それがヨーロッパ統合(EU)のダイナミズムに関心を持ったきっかけです。自分たちの生きている現在の世界や将来を予測するのは難しいのですが、それでも何とか歴史のうねりのようなものを捉えたいというのが学問的な関心の根本にあります。

広い地球上には、仙台で日々を送る我々の想像力だけでは理解できないような地域や問題群が多く存在します。確かに、インターネットやYouTubeによって多くの情報を簡単に入手できるようになりましたが、その膨大な情報量と手軽さが徒となって深い理解と「現場」の皮膚感覚を遠ざけているような気がします。その意味で、高校時代にSGHのフィールドワークを経験できるのは、これからの人生に影響するような得難い機会になるかもしれません。また、課題研究に際しては、ソクラテスの至言である「無知の知」が示すように、中学・高校の社会科教科書に記述されるようになった「常識」を超えて(あるいは疑って)、「真理」を探求する営みを経験してほしいと思います。



戸澤英典先生



木村先生による講義



マングローブ研究所スタッフによる説明



広大なマングローブ林



干潮のマングローブ林にて



船に乗ってマングローブ林を観察

◆ ラノン Ranong (タイ南部)

8月2日(日)、3日(月)

UNESCOの生物圏保護区に指定されているRanong Biosphere Reserveでマングローブ林を観察し、翌日はマングローブと密接に関わって生計を立てている住民に「1970年代以降マングローブを伐採することで生活は豊かになったか」をテーマにインタビューしてきました。

マングローブ林に踏み入り、まずその壮大さに息を飲みました。鳥がさえずる頭上では葉の緑が明るく輝き、木漏れ日が差してマングローブ特有の根をやわらかく照らしていて、目を凝らすとそこには、小さなカニが擬態し息を潜め、泥炭の地面を歩くとトビハゼがびよんびよんと跳ねて逃げていきました。マングローブ林は有機物に富み、生物多様性が高いです。爽やかな林内には同時に、濃密な生気が感じられました。日本を発ち2日目の午後、私達のフィールドワークはここからスタートしました。

次の日はマングローブ林周辺の村でインタビューを行い

ました。漁師、村長、村人と政府の仲立ちをする方。それぞれ全く違うことを生業としていましたが、共通して、仕事については、生き生きと、お聞きした以上のことを語ってくださいました。各家庭で行った水質検査の結果は全てよいとはいえ、また日本に比べたら経済的水準は低いかもしれません。しかしそれは必ずしも不幸イコールではなく、そこには日々の生活にやりがい、誇りをもって生きる方々が沢山います。問題解決を目指すにしても、彼らに敬意をもち、現地の方々が本当に求めるのは何かよく考えることの重要性を再認識しました。(担当:町屋綾佳)

Ranong Mangrove Research Center所長のDr. Wijarnへ町屋さんがお礼のメッセージを送ったところ、以下の返信を頂きました。

Dear Students,

I did read your message to my staffs who accompany with you. My staffs were very impressed with your interesting to learn about mangrove ecosystems and mangrove communities. They told me that during they welcome you, you all played attention to learn about mangrove forest and asked questions related to mangroves species and so on. And during the field trip, you are also interested to learn the real natural class room which you can touch. You visited the beautiful and abundant mangrove forest in Southeast Asia where the giant Rhizophora located. And that area was registered as the Unesco Biosphere Reserve (Ranong Biosphere Reserve). I think that you had a good opportunity to visit the significant areas of UNESCO designation. I would like to thank the teachers who have a high sight to give this chance to you. I hope one day, in the future, one of the students or more who visit Ranong will be an outstanding researchers in mangrove ecology or scientists in this field.

Finally, I hope your field trip to Ranong Mangrove Forest Research Center gave you a lot of experiences. You studied not only the natural resources but also about people as well. These experience would give you a good success in your life in the future.

Best wishes,

Wijarn Meepol (Ph.D. in Forestry)

Ranongの住民へのインタビュー



◆ Water for Cambodia (WFC)

フィールドワーク5日目の8月5日、私たちはカンボジアのNGOのWater for Cambodiaに訪問し午前中はWFCでシエムリアップ市内の地下水についての説明を受け、午後には実際に近隣の村で地下水のサンプリングを行い、WFCのラボに戻って水質検査について教えてもらいました。WFCでは大きく分けて3つの仕事をしています。1つ目は水質の検査、研究、2つめは安全な水の提供、3つ目は現地の子供たちへの教育です。私が今回の訪問でバイオサンドフィルターという水の浄化装置にもっとも驚きました。バイオサンドフィルターは地中に設置されていて水をほしくなったら、装置に水を入れると浄化された水が1分ほどで出てきます。バイオサンドフィルターのなかは5つのエリアに分けられていて、そこで浄化されるのですが、どのような水も(雨水、井戸水、水道水、川、池の水なんでも)飲料に適した水質になるということでした。またこのフィルターは15から20年は交換が要らないので交換方法の教育が要らないこと、再建費用が節約できることもおおきな利点として挙げられるそうです。わたしは実際に現地の人と話して感じたのは、向こうの人は高いレベルの水質環境を知らないのも日本人から見たら汚い水質環境に満足しているということです。満足しているとはいっても、実際水質基準を満たしていない水も多く、今後の課題研究で具体的な改善策を示すことが重要と感じました。(担当:中野賢治)



NthabelengさんによるWFCの説明(上)
バイオサンドフィルター(下)



課題研究 I

「世界の水問題」模擬国連体験授業

Classes for Model United Nations

7月7日(火)3・4校時、6・7校時に高校1年生全員を対象として、日本模擬国連(JMUN)で活躍する慶応大学、早稲田大学、一橋大学からの大学生3名を講師として招き、世界の水問題「水に対する人権」をテーマとした模擬国連体験授業が実施されました。

模擬国連では1、2名が1つの国の代表となり、特定の議題について実際の国連における会議と同様にスピーチや交渉を行い、決議案や修正案を採択することを目的としています。

これまで授業6時間分の事前準備を行っており、それぞれ次のような内容で理解を深めてきました。

<5月26日(火)6校時・7校時>

- ・教員による模擬国連の概要説明
- ・昨年度、校外の模擬国連に参加した生徒による報告
- ・5～6名が1ヵ国を担当する模擬国連練習、担当国理解

<5月27日(水)6校時>

- ・5～6名が1ヵ国を担当する模擬国連の練習
- ・共同決議案の採択

<6月10日(水)6校時>

- ・7/7実施の模擬国連体験授業の事前準備テーマ「水に対する人権」のバックグラウンドの理解

<6月24日(水)6校時>

- ・模擬国連体験授業の事前準備
- ・グループ(4、5人)による「水に対する人権」の理解の共有

<7月 1日(火)6校時>

- ・模擬国連体験授業の事前準備
- ・担当国理解、情報の共有、担当国の方針の決定



5/26 担当国の理解



5/27 休憩時間の話し合い

5月26日・27日は模擬国連の概要説明と水に関わる簡単なテーマを題材とした模擬国連の流れの確認、そして6月10日からは実際のテーマである「水に対する人権」の全体での理解、グループでの確認、そして担当国の理解、方針の決定というような流れで7月7日を迎えました。

7月7日は、初めに模擬国連の概要やルールの説明が行われ、次に1、2名が1ヵ国を担当して国の代表として討議を進めていきました。

この模擬国連体験授業を通して、生徒たちはそれぞれの国の水問題に対する捉え方や立場の違いを知り、その中で自分の考えや立場を「相対化する力」や、問題の原因や構造の「本質を見抜く力」を意識し、論理的な思考力や交渉力を身に付ける貴重な機会となったことを感じたようでした。



国を代表した公式討議(スピーチ)

動議(motion)の確認



《参加した生徒たちの感想から》

・ただ自分の国のためだけに主張するのではなく、似た環境の国、異なる環境の国、様々な立場や観点から問題を見つめることが大切だと分かりました。

・先進国や発展途上国などの色々な視点から物を見ることが大事だと感じられる時間だった。

・水をとりまわっている環境には、様々な要素が複雑に絡み合いながら存在している。なぜ水が豊富なのか、なぜ足りないのかといった理由を探るためには、より細かいたくさんの情報を得て、それらを組み合わせて考える必要があった。情報収集力と論理的思考力を鍛えることができたと思っている。